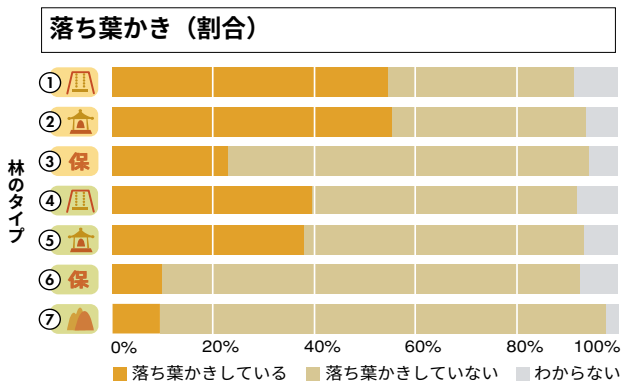
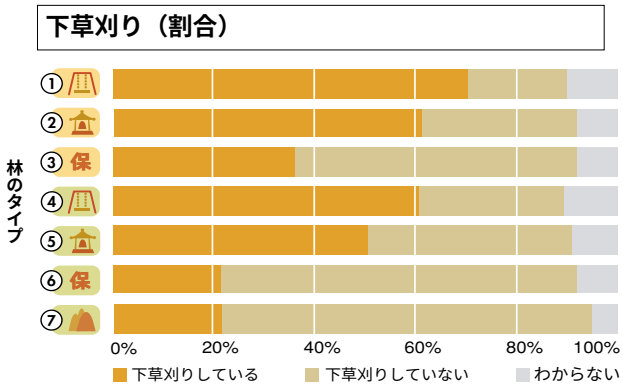
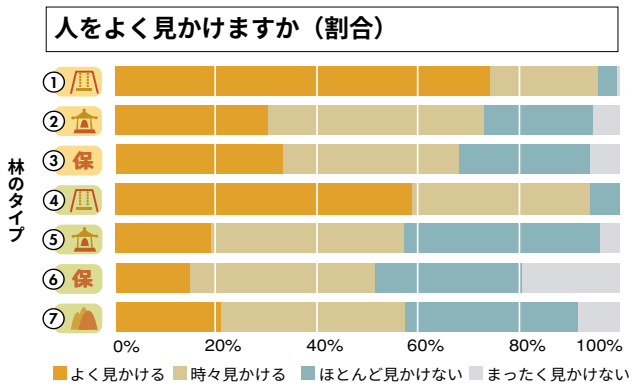
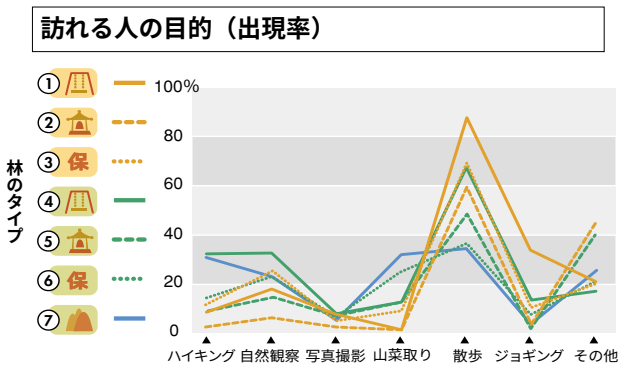
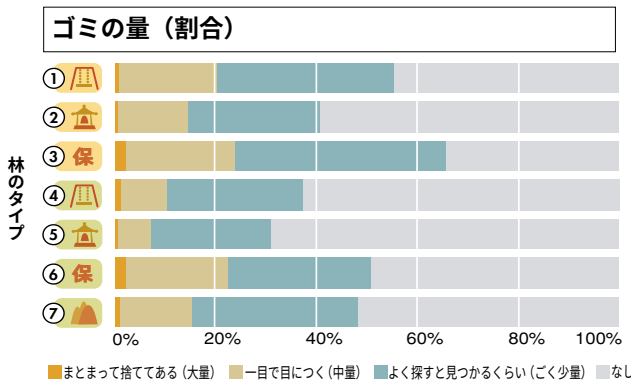
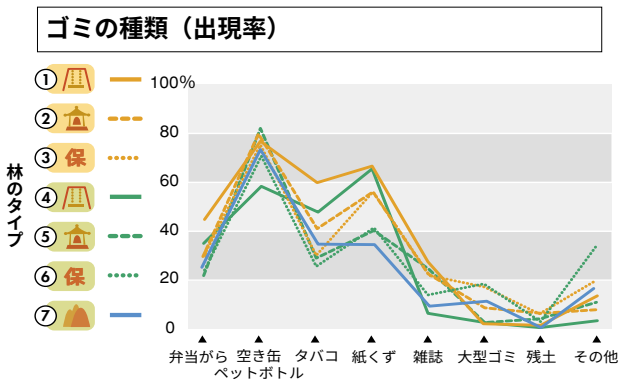
林のタイプ別に見た林の現状

身近な林は、昔からいろいろな形で人々に利用されてきました。樹木を切り倒して材木や薪（まき）、炭として使う場合もあれば、山菜やキノコなどを食糧として利用する場合もありました。雑木林と呼ばれる里山の林では、そうした利用がしやすいように、定期的に落ち葉かきや下草刈りが行われていました。落ち葉は田畑で使う堆肥（たいひ）として使われることも多くありました。

こうした管理が行われなくなると、植生の遷移（せんい）が進んで、その地域の自然林に移り変わっていくという面と、ササ類が茂ったり常緑樹が多くなって、林が暗くなり、明るい林に生息する動植物が姿を消してしまうという面があります。どちらの面を重視すべきかは、その林の置かれた状況によっても違うでしょうが、身近な林では実際にどの程度そうした管理が行われているかを林のアンケートの結果を使って林のタイプ別に調べてみました。

その結果、落ち葉かきについては、市街地・住宅地の公園林と屋敷林・社寺林では約半数の場所で行われていました。市街地・住宅地であっても保存緑地・斜面林（しゃめんりん）では落ち葉かきをする割合が明らかに少なくなっていました。また、農村の場合も同様な傾向が認められました。こうした傾向は、下草刈りについてもまったく同じでした。

人による利用についてみると、公園林で人を見かける割合が特に高く、またその目的はいずれの林でも散歩が最上位を占めていました。現代では、身近な林を訪れる目的は、山菜とりのような資源としての利用ではなく、散歩などの健康維持や趣味のための利用が大多数を占めていることがよく現れています。

林のなかのゴミの量を聞いたところ、特に市街地・住宅地の保存緑地・斜面林にゴミが多いことが分かりました。この結果からは、人がよく利用している林にゴミが多いわけではなく、むしろ人の利用が少ない林がゴミ捨ての場として意図的に使われていることが推測されます。公園林では、管理の目が行き届いているためかゴミは少なく、屋敷林・社寺林ではさらに少ないことがわかりました。なお、ゴミの種類としてはほとんどの林のタイプで空き缶・ペットボトルが１位を占めていました。